

2023
道

西南学院大学 神学部学生会発行 No.48

.....

・教員からのメッセージ

・特集記事

＜第二回済州島青年平和学校＞

＜バークレー先生ご退任を覚えて＞

＜神学部学生会の現在＞

＜神学寮での学び・・・＞

・神学生紹介

.....

目 次

1. 巻頭言

《主からの期待を受けて》……………	2023 年度学生会長 長尾基詩	3
-------------------	------------------	---

2. 教員からのメッセージ

《境界を生きる》……………	神学部長 才藤千津子	3
---------------	------------	---

《「先生と呼ばれてはならない」雑感》……………	金丸英子	4
-------------------------	------	---

《死神》……………	濱野道雄	6
-----------	------	---

《まことに、この人は神の子だった—2023 年 4 月 24 日神学部チャペル説教から》		
--	--	--

……………	須藤伊知郎	8
-------	-------	---

《「イエス・キリストの御名によって」》……………	日原広志	9
--------------------------	------	---

《「共に、平和」》……………	黄 南徳	11
----------------	------	----

《16 世紀の一人の宣教師の声に耳を傾けて》……………	Girardo Rodriguez	12
-----------------------------	-------------------	----

《「聖書とともに、煩悶し、迷うこと」》……………	藤方玲衣	13
--------------------------	------	----

3. 特集記事

《第二回済州島青年平和学校》……………	長尾基詩	15
---------------------	------	----

《バークレー先生ご退任を覚えて》……………	金丸英子、濱野道雄	18
-----------------------	-----------	----

《神学部学生会の現在》……………	長尾基詩	21
------------------	------	----

《神学寮での学び・・・》……………	石原 誠	22
-------------------	------	----

4. 神学生紹介

【最終学年】

大学院神学研究科修士 2 年……………	原田 仰	26
---------------------	------	----

【在校生】

大学院神学研究科修士 2 年……………	吉田睿濫	27
---------------------	------	----

神学部神学科 4 年……………	奥田 悟	28
-----------------	------	----

神学部選科神学科選科 1 年……………	石原 誠	29
---------------------	------	----

神学部神学科 3 年……………	長尾基詩	30
-----------------	------	----

5. 編集後記

		31
--	--	----

巻頭言

《主からの期待を受けて》

2023 年度神学部学生会会長 長尾基詩

全国諸教会の皆様、日ごろから私たち西南学院大学神学部をお祈りに覚え、支援をくださっていることを感謝いたします。今年もまた神学部誌「道」を発行し、神学生の現在の実情、教員からのメッセージを皆様に発信できることを嬉しく思います。

最近、連盟、連合の中で対面の集会が徐々に再開し、話し合いの時間が多く持たれているように思います。それ自体は主の前に私たちすべての存在が会衆としてあるバプテストにとってとても喜ばしいことでしょう。しかし、ほぼすべての集会でこれからの私たち教会の未来を憂う声が聞こえないことはないことも事実です。明確な答えのない問いを問い続けるということは苦しいものです。

思えば神学するということがまさに明確な答えのない問いを問い続けるということに他ならないと気づかされます。私たちはこの神学するという営みをなぜし続けることができるのか？改めて一歩立ち止り考えさせられました。

私たちが主と出会わされ、信仰を与えられた時、私たちは主に何かを期待したのではないのでしょうか。それは自分の救いかもしれませんし、癒しであるかもしれませんし、友であるかもしれません。

私たちが信仰を与えられ、キリスト者として立たされた現在、主もまた私たちに期待をされているのではないのでしょうか。聖書には私たちがあるがままで受け入れられているという福音と同時に私たちはどう生きるべきであろうかという問いに対する指針もまたあります。主からの期待に私たちはどう応えるべきでしょうか？今こそわたしたちキリスト者のすべてに与えられたイエス様の召しに聞き入りたいと思わされます。

教員からのメッセージ

2023 年度神学部長

神学部教授会

才藤 千津子



《境界を生きる》

昨年、大学院の授業で取り上げた牧会学のテキストは、Robert C. Dykstra, *Images of Pastoral Care: Classic Readings* です。この本の編著者ロバート・C・ディクストラは、現在、アメリカ東部のプリンストン神学校の牧会神学教授です。この本で、彼は、英語圏において 20 世紀の牧会学に貢献した 19 人の牧会学者の代表的な著作を紹介し、彼ら現代牧会学の研究者たちが、「傷ついた癒し人(wounded healer)」（ヘンリ・ナウエン）や「賢い愚か者(wise fool)」（ドナルド・キャップス）、「生きた人間のネットワーク (living human web)」（ボニー・ジーンマクレモア）など、さまざまなメタファーを使って現代の牧会や牧

会者のイメージを描き出そうとしたことを評価しています。そして、これらのイメージを一冊にまとめることで、牧師や神学生が、自らの牧会スタイルを方向付けるメタファーを見分けることができるだけでなく、ミニストリーにおいて自分に役に立つメタファーを発見する助けとなることを願っていると書いています。(同著、p.8)

この本の中のエッセイとイメージの数々に触れた時、私は、人や共同体の牧会について衝撃的なまでに豊穡な知恵と経験の世界に出会う経験をしました。ここには、古くからキリスト教共同体においてケアの行為を導いてきた実践的な知恵が、現代の信仰の言葉で表現されているのです。しかし、私がこれらのテキストに惹かれるのはそれだけではありません。これらのテキストに通底しているのは、牧会で人々の魂について語るときには、合理的な言葉ではなく、「イメージ」や「メタファー」を通してでなければ表現できない、うまく伝えられない何かがあるという確信、そして、そのことの痛みです。

牧会学を学び始めた頃、先輩たちからよく聞いた言葉があります。それは、牧会学という分野のアイデンティティのあいまいさと脆弱性であり、牧会学は、聖書学や組織神学など他の神学に比べて神学的厳密性や論理的整合性に欠けるとして批判され、神学の周縁部に置かれてきたという事実です。

現場での実践においても、例えば私は、神あるいは他者との関わりにおいて、自分が何をなすべきか確信をもってわかっているという感覚を持つことはありません。人は複雑な生き物ですし、込み入った人間関係の中で何が起きているのかを即座に見通すことなどできません。人々が失望や喪失、絶望に直面したときにどう「対処」すべきかを明確に知っているなどと言う人がいれば、私はそれを疑うでしょう。

しかし、ディクストラは、教会と社会の「周縁部」「境界上」に置かれているという脆弱さや曖昧さ、断片的なアイデンティティは、牧会学の重荷であるとともに、その召命であり、恵みでもある (p.2 他) と述べています。なぜならば、牧会学者と牧会者が注意を向けようとしてきた人たちも、社会のパワー (力) の中心におらず、周縁部に置かれているか、人々から忘れ去られている場合が多いからです。(p.4) この本の著者たちは、「周縁部」「境界上」に置かれて苦悩し、絶望している人々に寄り添うための鋭い感性のようなものを持っています。これこそが、牧会や牧会学の先達者たちが育んできた貴重な財産だと言えるのではないのでしょうか。

神学部教授会
金丸英子



≪「先生と呼ばれてはならない」雑感≫

聖書に「あなたがたは、『先生』と呼ばれてはならない」(マタイ 23:8) とある。そ

のためか、「全員『さん』づけで呼びましょう」は教会でよく耳にする。しかし、多くの場合、現役「牧師」だけは例外である。それを求め、教会に周知させる牧師・教会もない訳ではない。「教師はキリスト一人だけ」なので「先生と呼ばれてはならない」という聖書の教えに従うなら、牧師も「先生」と呼ばないことにしたらどうか。

私の場合、牧師経験があり教員でもあるので、どう呼んだものかと教会では迷う時もあるらしい。そこで「先生」で呼ばれたり、「さん」で呼ばれたりするが、どう呼ばれても返事をする（長い間「先生」と呼ばれてきたので「さん」は少し慣れない、が）。ところで、知り合って以来「金丸さん」としか呼ばない教会の知り合いがいる。こちらの状況がどう変わってもずっとそうなので、字義通りの意味で「有り難い」（ある日、その人が「先生」と呼び出したら「怪しい」と思わねばならないだろう）。

誤解のないように言っておきたいが、「先生と呼んでほしい」のではない。場面によって（多くの場合、人目のある時と、ない時）で呼び方を変えるのをやめていただきたいのだ。そして、こちらの方がもっと大切。個人の判断で呼びたいように呼ぶ自由を認めてもらいたい。「先生」と呼ぼうが、「さん」と呼ぼうが、本来その人の存在と人格に対する尊敬の念には何の関係もない。「先生」と呼ばれると上等の人間になり、「さん」になると人間の質が下がる訳でもないことは、当の本人が一番よく知っている。しかし、そう考えない人も教会にはいる。

昔、西南に W. M. ギャロットという宣教師がいた。弱冠 22 歳でサザンバプテスト神学校から聖書学の博士号を授与され、将来の教員候補に目されながらそれを捨てて日本に来た。私は 1989 年にその神学校に留学したが、当時すでに退職していたある老教授からこう聞いた。「あなたは日本のバプテストらしいが、ギャロットという宣教師を知っているか。彼が博士号を拒んだのを知っているか。『聖書は、あなたがたは先生と呼ばれてはならないと教えているので、自分も Dr. の学位はいらない』と言って大変だったという話だよ」。そこでは伝説になっていたらしい。それにしても徹底している。

最後に個人的な経験。留学中、メンターを一貫して「Dr.」で呼んでいた私は、博士号を取った後、これまでの習慣で「Dr.」と呼ぶと、「君が私のことを『Dr.』と呼ぶ限り、私も君を『Dr.』で呼び続けるがそれでいいか」と間髪入れずに言われた。もはや教師と学生の関係ではなく、同僚であるという意味らしい。呼称の問題は、呼ぶ側と呼ばれる側の人格的な関係から生じる自由に基づく事柄である。間違っても「教会で一律にそう決めたから」ではないであろう。それは、バプテストのスピリットとは異なると思う。



《死神》

落語に「死神」という噺があります。借金をして生きる希望を失った男に死神が現れ「医者になって金を稼げ。病床に行き、死神が頭の方にいるなら病人は寿命だが、足の方にいるなら、じゅ文をとなえれば助かる」と言いました。その通りにすると、男は名医として評判になります。しかし浪費癖はなおらず、ある病気の金持ちの頭側に死神が座っているにもかかわらず、病床をまわして延命してしまいます。怒った死神は男を穴ぐらに連れていくと、そこには人の寿命を表すローソクが沢山ならんでいます。その男のローソクは延命した金持ちのローソクと入れ替わっており、まさに消えようとしている。男は死神に命乞いをしますと、他のローソクに火を移せば助かると聞いてあれこれするのですが、その火を見つめたまま「ああ、消える」といってぼったり倒れてしまうというサゲです。このサゲには色々なバージョンがあり、そこにそれぞれの落語家の死生観がうかがえます。

8月初め、突然の網膜剥離で緊急入院・手術をしました。手術後、何も見えず病床に臥せっていますと、色々なことを考えてしまいます。そして「この病氣は治るにせよ、だんだん健康も思うようにいなくなってきたから、やがて、同じ感じで一人死んでいくのだろうな」とまで考えてしまいました。死神をだますこと等、誰にもできません。急なことに對する適応障がいだと思いますが、私にとっては不安、絶望、孤独でした。人間、自分の思いの世界に閉じこもるなら、ゆき詰まるのかもしれない。

祈りました。その時、「私」の外から声がしました。私の隣にしながら、私を越えて、イエスが共にいて、聖書の言葉を語り掛けて下さる。私の思いを越えて、不安ではなく信仰の、絶望ではなく希望の、孤独ではなく愛の物語を語って下さる。そしてこの物語に生きたのは、先に召された父や母、そして今、心配してくれる家族も同じ。駆けつけてくれる牧師、リモート礼拝で祈ってくれる教会の方々によって、私は信仰と希望と愛を支えられている。

この信仰と希望と愛を生き、語り合い続ける、それが神学校の学びであり、私の仕事なのだと思います。

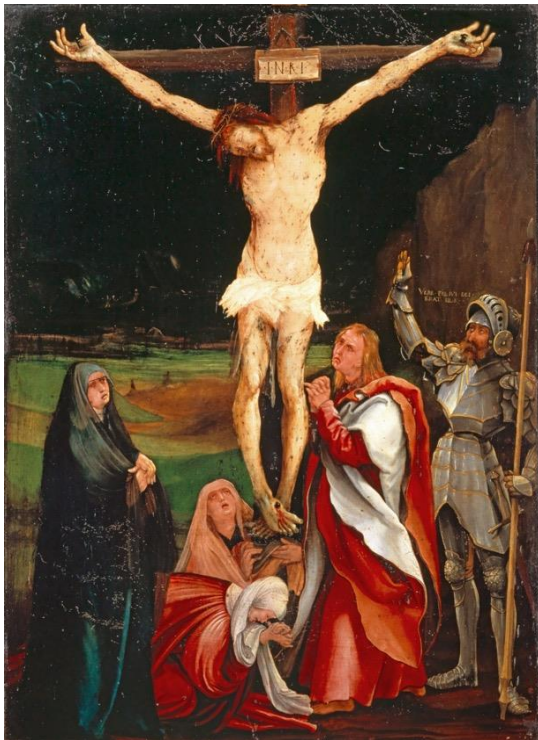
落語「死神」はグリム童話「死神の名付け親」を基にして明治につくられた噺です。グリム童話では最初に、医者となる男の親が、その男の代父（名付け親）を探して、神に会いますが、父は神に「あなたはお金持ちには与え、貧しい者にはひもじい思いをさせる」と言って、代父になってもらうことを拒みます。その後、死神に会い「あなたはわけへだ

てなく、お金持ちも貧しい者も連れていく」といって代父になってもらうところから物語は始まります。この死神は医学などの科学、そして「私」が理解する限りの人間の世界の象徴かもしれません。平等で、しかし対話はできません。死神を前に、「私」は諦めることしかできない。しかし、死神は神ではない。そして神は（映画『戦争のはらわた』でシュタイナー伍長が言うようには）無自覚なサディストではない。「私」の理解する、そのもう一つ向こうに、神は連れていく。信仰と希望と愛を、霊なる神が下さろうとしている。それをすべての人と共に受けたいのです。アジャラカモクレン、テケレッツのパー！

神学部教授会
須藤伊知郎



《まことに、この人は神の子だった—2023 年 4 月 24 日神学部チャペル説教から》
イエスに向かって立っていた百人隊長は、このように息を引き取られたのを見て、
「まことに、この人は神の子だった」と言った。(マルコ福音書 15:39、聖書協会共同訳)



マティアス・グリューネヴァルト（マティ
ス・ゴタールト-ニタールト）「キリスト磔
刑」バーゼル美術館。画面右に百人隊長が立
っており、ラテン語で VERE FILIUS DEI
ERAT ILLE「まことに彼は神の子であった」
と書かれている。

Matthias Grünewald (Mathis Gothart-Nithart), Die Kreuzigung Christi, in: Kunstmuseum
Basel, Sammlung Online,

<https://sammlungonline.kunstmuseumbasel.ch/eMP/eMuseumPlus>, Zugriff vom 15.9.2023

十字架刑執行の現場責任者であった百人隊長は、どうしてイエスが神の子だと分かった
のだろうか。「このように息を引き取られたのを見」たからだろうか。しかし、十字架に
つけられて何もできず、悲惨な姿で無力に死んでいく姿を見て、神の子であると認識でき
るとは到底思われぬ。ローマの兵士にとって「神の子」とは、デナリオン銀貨に刻印さ
れているように、元老院によって死後に神として神格化された先帝（この場合は初代アウ

グストゥス)の後を継いだ皇帝(第2代ティベリウス)のことであり、常識的に考えれば、そのローマ皇帝に逆らったとして反逆罪で処刑されたイエスであるはずはない。直前の38節に「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。」と書かれているので、これを目撃して「神の子」だと分かったのだろうか。しかし、処刑場のゴルゴタの丘はエルサレムの城壁の外、西側に位置していて、そこから神殿の垂れ幕は絶対に見えない。百人隊長は視覚によってイエスを神の子であると認識したのではないのである。では、聴覚はどうだろうか。

ここでヒントになるのが、「まことに」という言葉である。原典のギリシア語でアレートース(ἀληθώς)であるが、この副詞に対応するヘブライ語はアーメン(אָמֵן)とその派生語である。アーメンは、誰かが先に言った言葉に対して、「まことに」と応える言葉である。ところが生前のイエスは、まだ誰も何も言っていないのに、自分から「アーメン、私はあなた方に言う」と語っていた。聞いている人々はさぞびっくりしたことだろう。しかし、実はイエスには神の言葉が先に聞こえていたはずである。彼はいつも神と対話していた。そこで、神から言葉を聞いて、「アーメン」、まことに、その通りです、と言ってから、聞いた言葉を周りの人たちに伝えていたのである。

マルコ福音書では、イエスがバプテスマを受けた時、天が裂けて「あなたは私の愛する子、私の心に適う者」という声が生じた(マコ 1:11)。また、山上で姿が変わった時に雲が現れ、その中から「これはわたしの愛する子、これに聞け」という声が生じた(9:7)。前者はイエス(とバプテスマのヨハネ)、後者はペトロ、ヤコブ、ヨハネの弟子たちに対して語られた声だが、いずれの場合もこれに対する応答は記されていない。ここで 15:39の百人隊長の「まことに」が応答であるとする、その直前に「これはわたしの愛する子」という声が、三度目に響いていることになる。バプテスマの際に天が裂けたように、十字架刑の際に神殿の垂れ幕が裂けて、決定的な神の音が響いたのである。百人隊長はその声に応答した。福音書を読む読者は、この百人隊長の告白を通して今も響いている神の声を聞き、この声に「まことに」、アーメンと応答するよう、促されている。

神学部教授会
日原広志



≪「イエス・キリストの御名によって」≫

ヘブライ語には「ゲマトリア」というアルファベット子音文字自体の持つ数値を利用し

て単語を合計数に置き換える独特の表現法・解釈法が存在します。語末形と基本形で数価を区別しない方式としては、「皇帝ネロ」(קסר נרון) が $100 + 60 + 200 + 50 + 200 + 6 + 50 = 666$ になるとか、「神の子ら」(בני־האלהים) が $2 + 50 + 10 + 5 + 1 + 30 + 5 + 10 + 40 = 153$ になる等が有名です。同様に数えると、「イエス」(ヘブライ語 イエーシューアア יֵשׁוּעַ) は $10 (\text{י}) + 300 (\text{ש}) + 6 (\text{ו}) + 70 (\text{ע}) = 386$ となり、「キリスト」(同マーシーアハ מְשִׁיחָא) は $40 (\text{מ}) + 300 (\text{ש}) + 10 (\text{י}) + 8 (\text{ח}) = 358$ になります。「イエス・キリスト」(イエーシューアア・マーシーアハ) は 744 です。しばし学問的厳密さから離れて数字の遊びの黙想を楽しみましょう。

例えば、「バラクエルの子エリフ」(אליהוא בן־ברכאל) は $1 + 30 + 10 + 5 + 6 + 1 + 2 + 50 + 2 + 200 + 20 + 1 + 30 = 358$ で「キリスト」と同数になります。これなどは、ヨブ記におけるエリフの弁論部分を後代の付加として過小評価してきたことに対する再考を促すかも知れません。

また、「二千匹の豚」(אלפים חזירים) は $1 + 30 + 80 + 10 + 40 + 8 + 7 + 10 + 200 + 10 + 40 = 436$ で「かの人間イエス」(イエーシューアア・ハー・アーダーム יֵשׁוּעַ הָאָדָם) $386 + 5 + 1 + 4 + 40 = 436$ と同数になります。これなどは「豚は死んでもいいのか」と悩む来会者や青少年クリスチャンへの何らかの語りかけの役に立つかもしれません。

神の固有名詞「主」(יהוה YHWH) は $10 + 5 + 6 + 5 = 26$ 、「彼にふさわしい助け手」(エーゼル・ケネグドー עֶזְרָא כְּנֻגְדּוֹ) は $70 + 7 + 200 + 20 + 50 + 3 + 4 + 6 = 360$ なので、「主」と「エーゼル・ケネグドー」を足すと 386 で「イエス」と同数になります。つまりイエスという名の中に、主とエーゼル・ケネグドーが寄り添っているのです。

「我々のかたちに、我々の姿に」(בצלמנו כדמותנוֹ בְּצַלְמֵנוּ כְּדִמוּתֵנוּ) は $2 + 90 + 30 + 40 + 50 + 6 + 20 + 4 + 40 + 6 + 400 + 50 + 6 = 744$ なので、「イエス」と「キリスト」の和と同数になります。

数字の総和は恣意的に幾通りでも当てはめ可能であり、学問的には論外の妄想に過ぎませんが、それでも旧新約聖書は神の民が世界帝国による抑圧の下で意気消沈した信仰共同体を励ますためにゲマトリアやアトバシュなどを真剣に用いたことを伝えています。

「今までは、あなたがたは私の名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」(ヨハネ 16:24)

このみことばを現在的な希望に満ちた救い主からの呼びかけとして聴くとき、「イエス・キリストの御名」にさらに広く深く思いを致すよう促されます。こうした黙想もその一助になるのではないのでしょうか。

神学部教授会
ファン・ナムドク



«「共に、平和」»

2019年に沖縄で第1回青年平和学校が開催された後、新型コロナウイルスの影響で延期を繰り返し、4年後の2023年に第2回目を開催することになりました。全世界的に発生したコロナは、これまで人類が花開いたと自負してきた文明に深刻な問いを投げかけました。無限生産と資本の利益だけを追求する資本主義と人間中心の科学技術主義に対する問いかけは、人間と自然の生活と存在の意味について、根本的に考え直させられました。一方では、人間と自然を分ける西洋式の二項対立的思考から、人間と自然が共存するより大きく宇宙的な生態系の平和を議論し、新しい未来を追求するようになりました。

自然はもはや、科学研究の対象としてのみ存在したり、人間社会の発展のための征服と搾取の対象ではなく、人間と共に生きる「私-あなた」の隣人である生命共同体だと自覚したのです。生態系の生命を尊重し、自然と共に生きる(living together)平和を実現しなければ、私たちは今後、コロナよりも大きなパンデミックを経験することになるでしょう。

このように新型コロナ19が私たちに与えた教訓を思い起こしながら、第2回アジア青年平和学校をチェジュ島カンジョン村で開催したことは、もう一つの特別な意味を与えています。ここカンジョン村は、住民と平和団体の強い反対にもかかわらず、政府と軍が建設を強行し、2016年に海軍基地が建設され、平和の島、チェジュ島が東アジアの平和を脅かし、軍事的緊張が高まっている場所となりました。海軍基地が建設された時、クロムビ岩が破壊され、海の中の生物が化学爆発物によって一瞬にして死んでしまいました。人間の利己心と欲望のために生態系は一朝一夕に破壊され、戦争訓練が絶えない場所となりました。そのため、チェジュカンジョン村に建設された海軍基地は自然の生命を破壊し、東アジア地域の安全と平和を壊す反平和の象徴です。したがって、コロナ時代からついに抜け出せた時点において、ここで第2回平和学校を開催したことは、多次元的な平和の意味と必要性を思い出させてくれます。同時に、私たちは質問を投げかけます。

どうすれば私たちは平和な世界を作れるだろうか？

平和に関連して、平和を作る(peacemaking)、平和を守る(peacekeeping)、平和を築く(peacebuilding)という言葉があります。

「『平和を作る』とは、戦争、争い、分裂、葛藤など、平和が壊れた状況を終わらせ、再び平和を作るという意味です。...『平和を守る』とは、再び作られた平和が壊れないようにしっかり守ることを意味します。...『平和を築く』とは、平和の土台を強固にし、

人々の関係を変化させるための総合的な努力を意味します。」¹

私たちは平和を作る人、平和を守る人、平和を築く人にならなければなりません。ここで共通しているのは＜私たち＞ということです。平和は政府や国が与えるものではなく、民である私たちが作らなければなりません。平和を作り、平和を守り、平和を築くことは私たち自身がしなければならないことです。

それぞれの国で、それぞれの住んでいる地域で、それぞれのいる生活の場で平和のために働き、同時に私たちは地理的な国境を超え、文化と言語を超え、人種を超え、宗教を超え、共通の目標であり課題である平和のために共に連帯し、実践しなければなりません。私一人だけでなく、共に働くというグローバルな連帯意識を持って、民が中心となる平和運動を展開しなければなりません。民である私たちは、貧しい者、社会的弱者の人権と正義のために闘い、福島発電所の汚染水放出に反対するなど、生命と平和のための国際的な連帯をしなければなりません。

この4年間は決して短い時間ではありませんでした。しかし、私たちはお互いを忘れてはいません。今こそ、平和なる世界に向けてさらに遠くを見据え、沖縄から始まった歩みを新たに整える時です。止められない私たちの平和の行進は、沖縄とチェジュを経て、東アジアに進み、ついに世界へと広がっていくでしょう。一人が十歩を歩くより、十人が一歩を歩く平和学校の歩みに、皆さんが参加し続けることを願っています。

最後に、今回のプログラムのために最初から共に計画し、準備して下さった＜東アジア平和センター・福岡＞の理事会、キム・ジョンヒ平和宣教師、そしてソン・ガンホ博士と『開拓者たち』のスタッフの方々に心から感謝申し上げます。

**この文は第2回アジア青年平和学校(済州、韓国/2023年8月15日-18日)で行った閉会のことばである。

神学部教授会

Girardo Rodriguez



＜16世紀の一人の宣教師の声に耳を傾けて＞

授業ではアメリカ大陸のキリスト教史に触れたとき、バルトロメ・デ・ラス・カサスと

¹ チョン・ジュジン『世界の平和、私の平和』大韓基督教書会、2012年、16頁。

いう人物を紹介したことがあります。ラス・カサスは16世紀のスペインの宣教師としてヨーロッパ人の征服者と一緒に新大陸に渡ったが、先住民に対するヨーロッパの入植者による不正を彼が非難しました。キリスト教の観点から主張して、ラス・カサスは先住民の権利を守るために尽力した。入植者は先住民を「文明化」する使命を持っていると言いながら、実際のところ先住民を苦しめていました。ラス・カサスはその入植者の偽善を強く批判した。

ドミニコ会員であったラス・カサスは、神学の学問や祈り生活や伝道活動を大切にしていましたが、そのような信仰の側面にとどまらず、先住民が直面していた諸問題の解決を求めて、広く活躍しました。例えば、先住民とヨーロッパ人が共に暮らす共同体を実験したり、スペインに戻って学者や政治家と論争したり、書物を執筆したりしました。その書物の中では、先住民とヨーロッパ人の行動が対比され、善と悪の戦いにたとえられています。そのような二元論的な描き方が批判されることもありますが、あくまでも比喻として読むことができます。

今日の世界を見渡すと、戦争や政治紛争により、多くの人々が暴力や権力の乱用の犠牲になっています。しかし、平和な社会であっても、パワハラや心理的イジメによって個人の尊厳が踏みにじられ、人間関係の巧妙な手段を使って周りの人によって犯されている人々がいます。

二元論的な見方に注意しながら、小さな行動においても私たちは人間関係のなかで常に善と悪のどちらかを選択しますから、ラス・カサスの声は今日でも、キリスト者として他人への接し方に警告しています。

神学部教授会

藤方玲衣

≪「聖書とともに、煩悶し、迷うこと」≫

ごきげんよう。藤方玲衣と申します。今年度より、西南学院大学神学部の教員として赴任して参りました。

数年前、学生としてこの『道』に文章を書きました。カール・バルトの論考「ヨブ」についての雑記のようなものだったと記憶しています。最初の大学での卒業論文から、今に至るまで、私の傍らにはずっと「ヨブ記」がありました。私は、「ヨブ記」に出会ったことから、ヘブライ語聖書の研究を始め、神学という営みに携わるようになったのだなあ、とつくづく思います。最初はヨブの叫びに惹かれ、そして謎めいたエリフという人物の声に興味を抱き、そして関心領域は、第二神殿時代の死海文書までつながりました。「ヨブ記」を読むことが、私のこれまでを導いてきましたし、またこれからも同じようであり続

ける気がします。

「ヨブ記」の物語では、ヨブと友人たち、そして神の間で対話が展開されます。神という存在をめぐる、異なる見解をもった者たちがそれぞれの声をあげています。ひとりひとりの言葉に耳をかたむけてみてください。どの言葉だってきっと、「間違っている」と言い切ることはできない内容を持っているように思えます。ヨブの友人たちの言葉は、ヨブの切実な訴えよりも、宗教的な教条を優先させ、苦難の中にあるヨブを傷つけるものだとも言われます。しかし、ひとがこうした考えを持つのはなぜかと考えてみると、また違うものが見えてくるかもしれません。ヨブに答えて神が発した言葉の内容は、「ヨブ記」の作者による神観念を表現したのですが、こうした神の姿について、読者であるあなたはどのような想いを抱くのでしょうか。そしてヘブライ語聖書の他の箇所では、「ヨブ記」の神とはまったく異なる神の姿も語られています（『旧約新約聖書神学事典』には、ヘブライ語聖書の神観念を要約するような一つの理念は存在しないと書かれています）。

聖書に向かい合うと、どれが、「ほんとうの」神の姿なのかわからなくなって、きっと（必ず）途方に暮れると思います。私は、そこそこが、神学の出発点であると信じています。聖書が証言する神は、ひとつの理念や、何らかの教義に縮減されるものではなく、生のなかで、歴史のなかで、そのひとと神との関係のなかで、かたりかける存在であるという気がしてなりません。ですから、ひとりひとりが神について語る言葉は、それぞれにとってのかけがえのないものとなるのだと思います。たくさんのいのちのなかにあふれる、豊か過ぎる神についての言葉の中で、ひとりの人間として煩悶し、迷うことこそが、神学の営みであると、私は考えています。

特集記事

《第二回済州島青年平和学校》

(文責：長尾基詩)

2023 年 8 月 15-18 日。東アジア平和センター・福岡の主催で東アジア青年平和学校が済州島にて開催されました。西南学院大学神学部神学コースからは、長尾、吉田 2 名の参加、人文コースからは 3 名で合計 5 名の参加がありました。また、東アジア平和センター福岡の主催者として神学部教授の黄先生も行かれました。引率者として濱野道雄も来られる予定でしたが、網膜剥離により残念ながら来ることができませんでした。

「平和学校の趣旨」

沖縄、済州、台湾から各国の青年が集い、それぞれの地域で平和活動をされている場所で実際に平和活動に加わりつつ、平和を作るとは何かを学びます。第一回は沖縄を会場に 2019 年に行われました。その後コロナの影響により、第二回目は延期を余儀なくされ今年ようやく行うことができました。

講師としてソン・ガンホ先生、内間清治先生をお呼びし、それぞれ済州島、沖縄の現状を教わり、平和行動の意義についてお聞きする機会を持ちました。講義だけでなく、フィールドワークとして済州島内を周り、済州島の抱える歴史、痛みを聞くことができました。



「済州島について」

北緯 33 度、韓国の南に浮かぶ火山島。年間 1500 万人もの観光客が訪れるリゾート地です。古くは 1402 年まで独立していた耽羅という王国に遡ります。1910 年の韓国併合で大日本帝国の領土となり、1945 年まで朝鮮総督府によって統治されていた歴史を持っていま

す。第二次世界大戦後の米ソによる朝鮮半島分割に際し、人民委員会が済州島を統治しました。しかし、政策を巡って人民委員会と米軍政庁は 1947 年から対立を深め、1948 年 4 月 3 日には朝鮮の南北分断を固定するとの理由から、南朝鮮単独での総選挙実施に反対する過程で済州島四・三事件が発生しました。

「済州島四・三事件」

少なくとも 3 万人の島民が南朝鮮国防警備隊やその後身の大韓民国国軍、西北青年会等の民間右翼など李承晩支持派の韓国人によって虐殺されたと言われている事件です。済州島内のコミュニティにおいて、四・三事件に関わりのない人はほぼおらず、誰もが本人または親族が虐殺された、虐殺した、スパイ行為を行った、迫害を受けた等の経験を持っています。

「済州島の現在」

今回の青年平和学校で主に拠点となったガンジョン村には大きな海軍基地があります。もともと自然豊かだった済州島の海岸が基地建設工事によって立ち入り禁止となりました。そこでは昔から済州島独自の信仰に基づく祈りが行われていて、その場所が奪われたということは信教の自由の侵害にもつながる問題です。現在もガンジョン村の基地前では日曜を除く毎朝抗議活動が行われています。一日も早く、済州島に軍事によらない平和が完成されることを祈りたいと思います。

「青年平和学校活動報告動画」

青年平和学校の内容をまとめたものが動画として一般公開されております。

<https://www.youtube.com/watch?v=l6d73v6JYLg>

上記の URL を入力、もしくは「The 2nd Asian Youth Peace School」と検索して頂ければ視聴することが可能です。

10 分ほどにまとめられた動画です。雰囲気もとても伝わってくるものですので、ぜひご覧ください。

「青年平和学校日程表」

済州島青年平和学校の日程表です。

予定表

時間	8/15(火)	8/16(水)	8/17(木)	8/18(金)
7:00～ 8:00		基地前集会	基地前集会	基地前集会
8:00～ 9:00		朝食	朝食	朝食
9:00～9:30		講義Ⅰ 質疑応答	現地見学 (4.3 平和公園)	後片付け
9:30～10:00				閉会式
10:00～11:50				出発 (10:00)
12:00～12:30		人間連帯運動		
12:30～2:00		昼食	昼食	
2:00～5:00		水遊び (江汀川)	現地見学 (アルトゥール 飛行場)	
5:00～6:00	登録			
6:00～7:30	夕食	夕食	夕食	
7:30～8:00	開会式	休息	プログラム 評価 (グループ及び 全体) (7:30-9:30)	
8:00～10:00	アイスブレイク	講義Ⅱ 質疑応答		
10:00～	就寝	就寝	就寝	

「青年平和学校の感想」

本誌「道」において、黄先生、吉田さんが今回の青年平和学校についてのことを執筆してくださっています。そちらの記事もぜひご覧ください。

《バークレー先生ご退任を覚えて》

ギャリーのこと

金丸 英子

今年度の『道』は、今年3月に退職なさった G. W. バークレー先生の記事を掲載するという。これまで定年退職した教員に関する記事はなかったので、ありがたいと言えばありがたいが、しかしどう書けばよいのか。私の神学部着任は2008年だと思うが（「だと思うが」も情けないことである）、その時バークレー先生はすでに学長か院長で、以来ずっと役職についておられ、教授会で同席したことはない。そういう意味で、「同僚としてのバークレー先生」という思い出のない私に、何が書けよう。

しかし、共通点はいくつかある。生年月日がほぼ同じで、私の方がわずかに数日早く生まれたこと。アメリカの同じ神学校、同じ課程（教会史）で学んで学んだこと。その繋がりで共通の恩師や友人が複数いること。その上、バークレー先生が西南に赴任する前、東京で1度会っている。その時、「神学部でドイツの神学者ディートリッヒ・ボンヘッファーで卒論を書いた」と言ったら、私がドイツ語に堪能だという誤った印象を与えたようで、それがアメリカの教会史の教授に伝わっていた。

私には「バークレー先生」よりも「ギャリー」がぴったりくる。メールの交換も「先生」をつける時とファーストネームの時があって、割合は後者が断然高い。私にとって、心情を吐露でき、自分の失敗、醜い部分、恥ずかしい部分を隠す必要のない、あたかも嵐の中の港のような存在だったのだ。にっちもさっちもいなくなると、パイプの葉タバコの甘い香りが漂う研究室に足が向いた。その求めに対して、学長・院長の過密スケジュールを理由に断られたことはない。こちらの言うことを黙って聞いてくれたが、「とりあえず」の慰めは言わなかった。キャンパスの立ち話も正面から応じてくれた。職場にこのような存在がいること自体、私には大きな救いで、毎日学研に入る際、建物を見上げ、ギャリーの研究室に目をやって「救いの在り処」を確認したものだ。私には、感情を表に出したギャリーは記憶にない。感情の起伏が少ないのではなく、感情のコントロールができていたのだ。それは持って生まれた性格とともに、ギャリーを育んだキリスト教の霊性によるものだ。そこから滲み出た穏やかな風貌と口調を前にして、こちらの構えは何度解かれたことだろう。

そのギャリーが早期退職で帰国すると聞いた時は悲しかった。これからどこに逃げ込めばよいのかと不安もあったが、ギャリーがいなくなって約半年、私はどうにかやっている。が、さびしさは消えない。近しい人を送るというのは、こういうことなのだろう。

謝辞

神学部長 濱野道雄

ギャーリ・ウェイン・バークレー (Gary Wayne Barkley) 先生は神学部での36年間のお働きを終え、2023年3月末日をもって選択定年制で退職されます。『神学論集』の本号をG・W・バークレー教授退職記念号として発行し、これをもって先生の神学部と西南学院への多大な貢献に対する感謝の意とさせていただきます。

バークレー先生は、サザン・バプテスト神学校大学院博士課程修了後、1984年から米国南部バプテスト連盟宣教師として来日されています。西南学院大学神学部では1987年より講師として歴史神学の教員の働きを始められ、助教授時代には私も学生として授業で教えて頂きました。1995年には教授に昇任、1996年からは神学部長を務められました。さらに2006年から2014年と2018年から2022年まで西南学院大学学長を、2012年から2020年まで西南学院院長を、2015年から2022年は西南学院理事長を務められました。先生は多大な期待と支持を受け、36年間の後半は学長や院長、理事長という激務且つ重大な責任を担う役職が続きました。結果、今年度担当された授業としては「キリスト教学」のみにならざるを得ず、恐らく先生が最初に日本にいらっしゃった時に想像なさったのとも違う年月を重ねられたのではないのでしょうか。

バークレー先生のご専門は古代キリスト教史で、中でもオリゲネスの研究をなさっています。博士論文のタイトルは『オリゲネスのレビ記説教：注釈付き翻訳』で、アメリカで発行されている教父文献のシリーズにその翻訳も収められています。しかし申し訳なくも、また他人事でなくとも思いますが、その激務の時代は学術論文の発表はあまりなさっていません。けれども原点にあったオリゲネス研究は、先生の学長等の働きを通して活かされ、西南学院を一味も二味も変えたのだと思います。オリゲネスは、その万民救済的神学などから、死後に異端宣告を受けています。そのオリゲネスに学んだバークレー先生は、信条主義をとらないバプテストの伝統にも沿って、敢えて言えば「キリスト教ではなくキリストを信じて」立っていらっしゃったと思います。そのため、決まり事や伝統や功利を第一とするのではない、その時々にも最もサポートを必要とする学生や働きに西南学院を導き向かい合わせる舵取りをお続けになることができたのだと、感謝しております。

また2000年の信仰宣言に表れていますが米国南部バプテスト連盟が共和党に乗っ取られるように右傾化・原理主義化した時、宣教師としての誓約書にサインを求められた際、その信仰宣言ではなく聖書を信じるという態度をとり、2002年には宣教師としての立場を辞され、リスクをもお引き受けくださったことに、私はずっと敬意を抱いています。

『美德の中のキリスト者』を記したスタンリー・ハワーワスは、キリスト者はヒーロー

ではなく、キリストの弟子であるセインツ（聖徒）になるように招かれているといいますが、バークレー先生からそのキリスト者としての大切な生き方を具体的に教えていただいたと思っています。人々の前に立ち、称賛され、競争に打ち勝ち、常に成功し、他の人々と違うエリートたるヒーローではなく、キリストを前に立て、誠実に人々と共に歩み、弱さも自覚し、学校という共同体を形成していくセインツの姿を、私はバークレー先生に見ます。この姿は実に、これから世界に出ていく学生たちだけではなく、牧師や教員も含めたこれからの時代のリーダーに求められるものでしょう。

キャンパスで出会えば、そっと近寄って下さり、静かにブラックジョークや自虐的な冗談をつぶやいて下さることももう無くなるのかと思えば寂しくなります。何より、もっと神学的な対話をしたかった、より学ばせていただきたかったという思いを、先生の教え子としても、不肖にして同僚として頂いた者としても抱いております。しかしバークレー先生は選択定年制で少し早く退職されることもあり、これからさらにご研究や神学部への寄与をして下さると期待もしております。オリゲネスや古代キリスト教史に関してのご研究とご教授、そして「キリスト教学」等では展開されていたと伺っております「霊性」に関するご研究とご教授が、これからさらに豊かに展開され、神学部で何らかの形で分かちあっていただけることを楽しみにしております。そしてきっとアメリカと、そしてバプテストの一番良い部分と、神学部をこれからも結び付け続けてくださることでしょう。

G・W・バークレー先生のお働きに感謝と敬意を表し、ご健勝を私たちの神に祈り、今後も様々な機会にご教授頂けることをお願い申し上げます。

2022 年 1 月

≪神学部学生会の現在≫

(文責：長尾)

「西南学院大学神学部学生会とは」

本会は、会員相互の親睦融和、学業の推進、学生生活の向上並びに信仰の練達に資することを目的とする。(西南学院大学神学部学生会規約第二条より)

本会は、前条の目的を達成するため、次の活動を行う。

- (1) 神学部での礼拝に関する活動
- (2) 会員相互の研鑽に関する活動
- (3) 会員相互の親睦と、体育の増進に関する活動
- (4) キリスト教の伝道に関する活動
- (5) 学生会機関紙の発行に関する活動
- (6) 大学祭に関する活動
- (7) 会員の福利厚生に関する活動
- (8) その他、学業、学生生活の向上に関する活動

(西南学院大学神学部学生会規約第三条より)

西南学院大学神学部学生会(以下、学生会)は、現在5名の神学生により構成されています。上記は規約より引用した学生会の目的ですが、より平易に言うならば、課外の活動として、牧会に必要なスキル、知識を身に着け、実践していくことが学生会の目的と言えます。そのための活動として、神学部チャペル、春の親睦会、秋の親睦会、クリスマス会などのイベント行事の統括から、本誌「道」の執筆、編集作業、人文コース生とのつながり、交流を持つというところまで幅広いものがあります。

「学生会の抱える課題」

現在学生会の抱える課題は圧倒的な会員の不足です。2018年度時点での神学生数が10-20人、1995年ごろの神学生数は20-30人でした。そのころと比較して昨今急激な人数の減少により神学生一人ひとりにかかる負担も増加していきっています。学生会活動の内容上、中止することの難しい働きが多く、人数減少に伴う規模縮小のための組織再検討がいまだ追い付いていない状況にあります。

この記事において、少しでも神学部学生会の働きを諸教会に皆様に知っていただき、お祈りに覚えつつ、献身者を送り出していただきたいと願っています。

「学生会年間行事一覧」

4 月新入生歓迎会

5 月春の親睦会、決算総会 神学生だより（神学部報に載せる）

6 月神学校週間

9 月卒業・修了・修士論文構想発表会、

10 月カリキュラム懇談会、秋の親睦会、「道」発行

11 月人事総会

12 月クリスマス会

2 月卒業・修了・修士論文最終発表会、教授・学生懇談会、年度末会議

【神学寮での学び・・・】

神学寮寮長：石原誠



西南学院大学神学部の神学生は、今現在単身寮に 4 名、家族寮に 1 家族の計 5 人の神学生が入寮しています。家族寮には神学生家族以外にも、「寮生の生活指導及び寮全般の監督にあたるもの」²という規定のもと“寮監”として金丸英子先生も寮生活を共にしてくださっています。また海外から来られた先生方もこの家族寮で滞在されます。

私たち神学生は、それぞれ主からの召命があり、教会から推薦され、西南学院大学神学部の試験、面接を通過して神学生になったわけですが、この過程の中で、「召命」と「教会の推薦」というのが極めて大切だという事を、私は一年半寮生活をしてきて、そして、今寮長という役割を担わせて頂く中で特に思わされています。なぜなら神学生は、学校での学問としての学びだけではなく、生活の全てにおいて、牧者としての学びが求められているように思うからです。

「生活の全て」と一纏めに一言で表現しましたが、この学びは突き詰めれば突き詰める程、難しいところがあります。それは誰かが教えてくれるわけではなく、神学生一人ひとりの自覚的な牧者へと向かう姿勢が問われるからです。神学寮で他の神学生と共に生活をしていると、生活スタイルの違いや、他者との関わり方の違い、それぞれの個性など、様々な部分が露骨に見えてきます。その中で将来の牧者である私たち神学生は、その一つ

²「西南学院大学神学寮規定（2001 年 1 月 23 日制定）」3 章-第 9 条-3

一つの事柄にどのように向き合っていくのか、その様な事をこの寮生活の中でトレーニングされ、鍛えられていくのだと思わされるのです。しかもそれは毎日続く日常のことで、連続性のある試練で、人によっては逃げ場がない状況になるかもしれません。

しかし、そのような時に支えになるのが、たとえ辛くとも、この道は主が与えてくださったものであるという確信です。そして、推薦教会、研修教会、全国諸教会の皆さんの祈りによる励まし。これらによって神学生の心は奮起され、み心を追い求め、祈り、喜んで日々を過ごすことが出来るようになるのではないかと思います。少なくとも私はその様に信じております。

生活の全てを通して学ぶという事ではありますが、神学寮では《神学寮の目的と入寮資格》という規定があります。「寮生は、将来牧師、伝道者として献身するにふさわしい者として、諸教会・伝道所より推薦を受け、かつ、神学部教授会において入寮を許可された学生に限ります。また、日本バプテスト連盟に加盟する教会から推薦された神学生は、原則として必ず入寮することになっています。

寮生活は、神学部の教育の延長であり、共同生活を通して福音宣教のための働き人としてふさわしい品性と知性を培うことを目的としています。（参照：西南学院大学神学寮規定→別紙）」³

ここに記されているように、神学生は寮生活を通して、福音宣教のための働き人としてふさわしい品性と知性を培っていかなければならず、神学寮はそういう場でなければならないという事が、通常の学生寮とは大きく違う点だと私は思っております。

さてここまで観念的なお話でしたが、ここからは私から見た神学寮生活についてご紹介いたします。

³ 「寮を歩けば-神学寮（単身寮・家族寮）入寮ガイダンス」（2022,3 発行 ）2 頁



まず一番の特徴は、大学の授業期間中、火曜日から金曜日は毎朝 7:30 から寮礼拝を行う事ではないでしょうか。寮礼拝では司会を輪番で回し、お祈りからスタートして、聖書教育の聖書日課の箇所をみんなで一節ずつ朗読します。その後、改めてその箇所を噛みしめるように黙想をし、次に「協力伝道カレンダー」に記載されている教会の事や、それぞれの祈りの課題を共有し、その事を覚え祈る時間を持つのです。最後は全員で「主の祈り」をし、学びへと向かう心備えをするというのが、今の寮礼拝のスタイルとなっています。コロナの影響もあって、今はこのようなスタイルになっていますが、その時々状況に合わせた形で寮礼拝を継続しております。

また神学寮には、ゼミ室、寮監室というのがあります。そこには神学書が並べられており、その資料を使用して調べものを行います。そして、ここにある資料は全国のパプテスト連盟に連なる教会の牧師の方々が献本してくださったものも多くあります。このような形で私たち神学生の学びをサポートしてくださっている事に、本当に有難く感謝な思いであります。ゼミ室の隣にはコピー室があり、神学部や神学寮に関わることはここで印刷をします。また、スキャナーもあるので、借りた資料などはここでスキャンする事も出来るのです。

そして食事に関してなのですが、授業期間中、月曜日から土曜日までの朝夕は食事提供があります。寮母さん寮父さんが毎日準備して下さいます。とても美味しくてボリュームもあるので、意識して自己管理しないと、気付かないうちに体重が増えていて、驚く時があります。特に私の場合は神学生となって机に向かう時間が多くなり、逆に身体を動かすことが極端に減ったという事もあるようです。ですので、意識的に体を動かし、健康管理をしっかりとしなければいけないと思わされる今日この頃であります。これから牧会の現場に出る私たちにとって、セルフケアは大切な事の一つだと思わされるのです。

このような神学寮ですが、健全な運営の為、そして神学生一人ひとりが勉学にふさわしい環境を自主的に作り上げ、維持してく為に「寮生会」という自治組織があります。これは神学寮で生活する神学生による自治組織で、毎月 1 回寮生会を開催しているのです。そこで神学寮での生活、献身者としての生活を、よりみ心に沿った良いものとなるように、話し合い、意見交換をし、神学寮の改善を図っているのです。

西南学院大学神学部的神学生の学びは、学校での学びは勿論のこと、神学寮と研修教会、三つの学びを併せ持って「キリスト教伝道者養成」を成していると私は考えています。ですので、ここでの神学寮での生活も学びの一端としてなくてはならないものであります。それらの学びを経て、それで十分という事はありませんが、人々の喜びだけでなく、痛みや苦しみにも触れ、「すべての造られた人々に福音を宣べ伝えなさい」というイエス・キリストに従順な牧者となっていくことが出来るのではないかと思います。



冒頭にも記した通り、現在神学生は 5 人です。今は少ないですが、これからまた増える時が来ると、信じて祈っております。是非この祈りを皆さまの祈りに合わせて頂けますと感謝です。また引き続き、神学校や神学生の事を覚えて祈り、お支え頂けます事を、心から感謝いたします。

神学生紹介

神学研究科修士課程2年 原田仰

推薦教会:平尾バプテスト教会

研修教会:久留米荒木キリスト教会

《一方では危険と隣り合わせ、もう一方の隣にあったのは》



夏に研修をさせていただいている教会のキャンプに参加した。幼児から高校生までの子どもたちが寝食を共にし、貴重な夏休みのひと時を仲間たちと過ごした。その教会に集う子どもたちは、おそらく他の教会に比べパワフルで自由奔放である。彼らが日々の礼拝で過ごしている様子は、世間一般が抱くであろう「教会は厳かで静かな場所」というイメージとは真逆である。そんな子どもたちと過ごすキャンプは大人にとって、かなりの緊張感をもった苦勞の絶えないものになるだろうと予想した。川遊びや BBQ など危険を伴うものだったからだ。しかし、その心構えはいい意味で裏切られることになる。

特に緊張を要したのは川遊びであった。子どもたちの命を預かる大人にとっては気が気でないプログラムの一つである。安全性を担保するため、川の下見調査、危険なラインの見張り、子どもたちには全員にライフジャケットを着用させた。結果から言えば、この川遊びで事故はおろか怪我をした子すらいなかった。前述したような大人の下準備のおかげもあるが、私が思うに怪我がなかった最大の要因は大人ではなく、遊んでいた子どもたち自身にあるように思えた。大人たちが行っていたのは命に係わるラインの見張りと簡単な補助がほとんどで、基本的に自由にさせていた。そして自由奔放な子どもたちだ、静かな遊びをしているのでもなかった。それはもう豪快だった。しかし、ただ彼らは何も考えずに遊んでいるのでもなかった。自分が遊んでいるその場がどれほどの危険を孕んでいるのかを理解していた。そして自分だけでなく、共にいる仲間のことも気遣っていた。興味津々ながらに恐怖も感じている小さい子には「君はダメ」と即座に禁ずるのではなく、年上の子が「ここに居てあげるから〇〇すれば大丈夫だよ」と言ったり、私が補助につくのを持たせたりして、自分たちで安全を確保しつつ、その子が最大限楽しめるような工夫を行っていた。

世の中には多くの危険があり、それをすべて避けることは不可能である。時には危険と隣り合わせの恐怖の中を歩まねばならない。これが現実だ。ただこのキャンプは、この現実が悲観に終らないことを子どもたち自身に、そして企画した大人たちに教えてくれた。隣にあるのは危険や恐怖だけではないと、共に突き進んでくれる、助けてくれる仲間もまたいるし、他者にとって自分がその一人となるのだと。それは嬉しく楽しいことなのだと。子どもたちがこの先を歩む中で、この経験が気づききっかけになることを願う。聖書が語る隣人愛のすばらしさと、神が自分にとって最大の隣人であることの喜びを。

神学研究科修士2年 吉田睿濫
推薦教会：福音村バプテスト教会
研修教会：福岡ベタニヤ村教会



《実りを信じるから種を蒔く》

主の御名を心から賛美します。今年の8月に東アジア平和センター・福岡主催の「第二回青年平和学校・チェジュ」に参加しました。西南学院大学の神学部生を含め多くの青年および一般の方と韓国のチェジュ島で3泊4日ともに過ごすことのできる時が与えられました。本土から離れていることによって都合の良いように利用されてしまう、まさに沖縄のようなチェジュの悲惨な歴史を理論的かつ実践的に学べたことがとても大きな経験だったのかと思います。しかし、私はこの平和学校が青年たちの学びや経験による平和運動家への全的な変化のためにあるものではなくむしろ一つの「種蒔き」だったのかと思います。この集会はもしかしたらからし種のような小さなものであり、それ自体だけでは何の意味もなさないかのように見えるかもしれないが、その種を蒔いたことによって平和の大切さと今後の実践が多くの「実り」として結ばれたきっかけとなったのは間違いありません。それは私だけでなく平和学校に参加した全ての方々が思われたことでしょう。同じように何か大きなことを始めるためのきっかけ作りは当然大切なことです。例えば新しい楽器が弾けるようになりたい、ダイエットに成功したい、より神さまとの関係を深めたいなど様々な願望がそれぞれあるかと思います。一方組織レベルでも同じことが言えますが、伝道を通して派遣していく教会となっていきたい、より地域に知らされる教会になりたい、牧師を招聘したい、あるいは教会員それぞれがより神さまと深く交わり、強く繋がる教会となりたいなどの目標を持っているかと思います。これらの大切な願いが「実り」となっていくために間違いなく「種蒔き」が必要になってきます。せっかく素敵な目標があるのに目標が「目標」とならず、立てたは良いものの結局中途半端なまま一年が終わってしまう、あるいは、教会のほんの一部の人のみが一生懸命働いているような状況。教会が目標を立てるのは、主が成し遂げてくださると信じる信頼に基づいた教会の「成長」が目的であって、叶わぬ願いを掲げているではありません。確かに教会員の思いの一致がない限りキリストの体として、成長の一步を進むことは本当に難しいことです。だからこそきっかけ作りすなわち種蒔きは、立てた目標の意味や背景、そしてそれが成された時の将来への希望までも見せるでしょう。きっかけがあるかないかで結果は大きく異なると思います。一人が十歩を進むより、十人が同じ一步を進むことができる教会はなんと素晴らしく力強い共同体でしょうか。

神学部神学科4年 奥田 悟

推薦教会：東京北教会

研修教会：福岡城西キリスト教会

《佇立》



1年半がたった。長いような短いような社会人を中断しての学生生活もまだ道半ばである。慣れてゆく部分と慣れたくはない部分とを相克しながら、教会で主に仕える働きをイメージしながら神学生をやらせていただいている。神学生の「学び」を口実の特権は発見の一つであった。本が割とやってくる。ありがたい話だ。福岡に来た時はあまり多くは無かった書棚も今では満杯となり、行先を彷徨う本もいくつかあったりする。その多くは多くの学業の課題に埋もれて開かれることは無いのは私の不精でもある。いつか一日を潰して読むような日もあろう。いただいた神学書でほぼ手付かずの新品のような書も結構ある。私もそのままだなたかに渡していくかもしれない。本とは巡り合わせである。だから、流動的なのは本の宿命の一部でもあり、我々もその流動体である。電子版だとうはいかない。そして、教会もまた巡り合わせである。現牧師が旧知の仲ということで福岡城西教会にお世話になっているが、来るべくして導かれたような、そんな感覚がある。合う、とか、合わない、とかそういう事よりも啓示的な形而上的な。神学生の特権あるいは欺瞞の一つとして、「何でも学びだから」という口実がある。まあそれは冗談にしても、素朴に自然に神意を思う事は私にとって真の意味では貴重だ。教会をはじめとして、様々な巡り合わせを感謝したい。

4年次という事で、学部卒業の年である。神学部といえど、大学である。いわゆる大学生のカリキュラムをなぞる毎日だが、若人の同学年たちは夏前には就活を終えて、卒論の本格化に向けて動いているのが昨今の一般的であるらしい。バプテストの牧師は、ある意味では就活に最も近い形態であるとも言える。会社も教会も巡り合わせであるが、主の御前で意志とビジョンとを互いに披露し、互いに決心を交換する意味ではある種巡り合わせを超える。そんな主の計らいに出会う事ができるよう、誠実に神学生としての学びを続けていきたい。学業としては私も卒業後の進路が決まる。一年の専攻科に進ませてもらったたく準備をしている。許されれば、いよいよ教会に仕える時が具体的になってくる。主に大きな期待をすると共に、静寂と深慮の時でもある。私の信仰は御心になっっているだろうか。私のキリスト理解は御心になっっているだろうか。吟味しながら歩みを今後とも進ませてもらいたい。

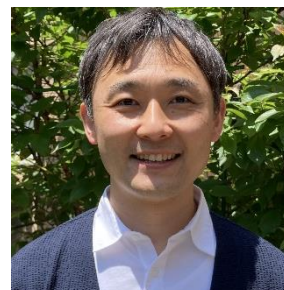
最後に、いつも祈りとお支えをいただいている推薦教会である東京北教会、前年度研修教会となっていたいただいた長住教会、そして、現研修教会の福岡城西教会の全ての方に神学

生の時を共に歩んでくださり感謝申し上げます。また、全国諸教会・伝道所の伝道者養成という協力伝道の働きによって、立てられ、支え励ましをいただいている事もありありがとうございます。主に仕え続ける事で、その一端でもその大きな恵みに応えていくものとして、歩ませていただきたいと願います。

神学部選科1年 石原誠

推薦教会：常盤台バプテスト教会

研修教会：鳥飼バプテスト教会



《主にひたむきに、従順に・・・。》

「人間の心は自分の道を計画する。主が一步一步を備えてくださる。」この箴言 16 章 9 節は、私の中で常に響いているみ言葉の一つです。そして、今回ボランティア研修で伺わせていただきました白浜バプテストクリスト教会の中でも、このみ言葉は力強く響き渡っていました。

白浜バプテストクリスト教会は和歌山県の海岸線近くにある教会で、私が伺った時期は海水浴に来られている観光客で賑わっていました。その近くには、観光名所の一つである高さ約 50 メートルの三段壁があります。悲しい事実ですがそこは、自殺の名所としても知られております。そこで“いのちの電話”や“自立支援”の活動をされているのが、白浜バプテストクリスト教会の藤藪庸一牧師です。また、地域の家庭や子どもたちに向けての支援もされていて、私はこれらの働きを間近で見たいとの思いを以前より持っており、この度 10 日間のボランティア研修が許されました。特に私は夏休み中の学童活動（サマースクール）や、子ども食堂の働きに参加させていただいたのです。この活動はここでは“コペルくん”という愛称で呼ばれております。また、いのちの電話をはじめ、これらすべての活動は、NPO 法人白浜レスキューネットワークという NPO 団体として活動しているのです。

私はここでご奉仕をさせて頂きながら、藤藪牧師は勿論ですが、共同生活者や教会員、NPO のスタッフの方々など、それぞれの視点の生の声を聴けた事がとても大きな恵みでした。というのは、ここに集う人々は実に様々な背景や思いを持っている人たちばかりで、私の知らなかった事や分かりえない事のリアルを話してくださり、それを感じとる事が出来たからです。

白浜バプテストクリスト教会の現状を知り、お聴きしたお一人お一人のリアルな物語とを照らしてみると、自然な形で教会は展開していき、振り返ってみると、それぞれの必要が整えられ、そして新たな課題、試練が与えられる。その連続で今がある。その様な印象を受けました。そしてそれが、この地に建てられた白浜バプテストクリスト教会に与えられている主のご計画なのかと思わされたのです。

藤藪牧師には今もなお、主から示されているヴィジョンがあるということです。それは養

護施設を開設するという事です。み心であれば、その為の必要が与えられることを願い祈っているのです。また藤藪牧師は「これでいい。これで十分だ。」と思ったらそこで終わり。その先はないだろうと仰います。ですから藤藪牧師は、常に祈って主のみ声を聴き、さらに祈ってその声が本物かどうかを見極め、理屈云々ではなく、とにかく従順に主の示しにひたむきに歩む、その姿勢を見せて下さいました。

今回の研修で、感じた事。気づかされたこと。全てを私の財産として今後の牧会者としての歩みに役立てたいと願っております。この様な機会が与えられ、心から感謝いたします。

神学部神学科3年 長尾基詩

推薦教会：府中キリスト教会

研修教会：福岡国際キリスト教会



《辺境からの宣教》

2023年の夏は様々な場所に行く機会が与えられた。韓国済州島のフィールドワークなどの外国に行った経験もさることながら、神学校週間では本当に多くの教会に献身を覚えていただき、礼拝を守る恵みに与った。感染症が落ち着いたことも起因し、さまざまな集会が対面で行うことが可能になった恩恵だろう。青年大会、壮年大会にも参加させていただき、これからの教会の課題を考えつつ、可能性に期待を抱く時となった。

学部の学びでは、現代神学が私の心を特に惹いた。今までのキリスト教を形作ってきた神学がヨーロッパ、白人、男性、支配者側の視点から構築されてきたことを知らされ私の目は開かれる思いだった。もちろん聖書の福音はわたしたちに慰めを届け、愛を伝える。しかし同時に「わたし」の所在を問うのである。イエス・キリストに出会わされ、変えられた「わたし」とは誰か。誰と生きてきたか、どこで生きてきたか、「わたし」に問う。信仰は真空から生まれないことを思うとき、日本という地で生きてきた人間の視点で神学をしてこなかったことに気づかされる。

済州島、筑豊と現地に行って学ぶ機会が与えられた。ただ歴史を傍観することが神学の学びではないことを教えていただいた。その時代、その場所で何が起こったのか、事実を検証することはできるだろう。しかしそれは歴史学や考古学であっても神学ではない。名前の無い墓石から聞こえてきたものは、「あなたはどこにいるのか？」という叫びに他ならなかった。強制的に日本という国へ連れてこられ、故郷へ帰るという希望を抱きつつ海に散り、浜に打ち上げられた無念の叫びが大地から聞こえてくる。

このような叫びを聞くということは、私たちにとって決して快いものではない。私たち

が蓋をしてきた闇の部分の真正面から見ていくときに私たちの存在そのものが肯定されるべきでないと感じるからである。だからこそ、迫害の歴史は日本人の目から隠されるのだろう。靖国神社遊就館、田川市石炭歴史博物館に行ったときに感じた日本の歴史認識の歪さがまさにこのことを表していると身に染みて感じた。教会が教会としてあるときに、黒い歴史、声なき者の声と誠実に向き合っているだろうか。まさに私のこととして問われる出来事であった。

編集後記

(文責：長尾)

神学部学生会として、今年度も『道』という媒体を通じ、諸教会の皆様とつながりを持てたことをとても嬉しく思います。今年度、大きく変わった点として『道』を冊子にして、諸教会に送付させていただくというものがあります。去年、一昨年とオンラインのみでの『道』発行という方針を取らせていただいていたいました。しかし、諸教会の皆様にしっかりと情報が届いているか、また発信側の利便性だけを考慮し、受信側の状況に目が向いていなかったのではないかとこの反省をいたしました。もちろん、オンラインになった経緯として発送作業の負担過剰という課題も踏まえ、実際の作業は外部に発注するという仕方での今回の『道』発行は実現いたしました。諸教会の皆様においては、二転三転する学生会の方針に混乱を覚えておられると思います。大変申し訳ございません。包み隠さず言うならば現在学生会の中でも大いに混乱が起きています。これまで何度か新入生 0 人という年度を経験し、これからの年度も新入生が来るかどうか、不透明な状態の中で常に判断を迫られていきます。しかしそのような中でも本誌『道』においては、目的に立ち返り、招聘を考えてくださっている教会の方々、献身を考えてくださっている方々に神学校の生の声を届けようと今回の作業をさせていただきました。

どうか本誌が必要のある方々の手に取られ、目的の果たされることを祈っております。ご支援、お祈りを持って支えてくださる諸教会の皆さんに改めて感謝いたします。皆様の教会において祝福が豊かにありますように。主に在りて。

『道』2023 (年刊・第 48 号)

発行日 2023 年 10 月 15 日

発行者 西南学院大学神学部学生会

Seinan,

Be True To Christ.

西南よ、

キリストに忠実なれ。